
アリスの国の兎

柳戸 綾香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アリスの国の兎

【Nコード】

N1667B

【作者名】

柳戸 綾香

【あらすじ】

白く霞んだ見慣れた街で、私は声をかけられた。「やあシロウサギ」アリスから逃げると言う不思議な世界の不思議な住人達。ウサギと呼ばれた少女の行き着く先は・・・？

第一章 シロウサギの常識

空がやけに青かった。

それ以外、特に変わったことなんて何も無かった。

だから、何が起ころでも無い。

ハズだった。

退屈な毎日には確かに飽き飽きしていたし、刺激が欲しいなんて友達と話したりしてたけど。

だけど、こんなのって。

想定外だ。

有り得ない。

「さあ、早くしないとアリスが来てしまいますよ。」

戸惑う私の顔を覗き見る紫の毛並みをした猫（二足歩行な上に、背丈は私より少し大きい。

しかも口が耳の辺りまで裂けてる。）に急かされて、私は穴の前にいる。

何でこんな事になってるのか、取り敢えず順に整理してみよう。

今日は終業式で、だから明日から冬休みで。

お決まりに長い校長先生の話を聞き、何処までも平均的な通知表をもらって、私は寄り道もしないで家に帰っている途中だった。

本当なら皆でハンバーガーでも食べた後、カラオケにでも行こうかと思っていたんだけど。

私ったら、校長先生の長い話にやられたのか終業式の真っ最中にぶっ倒れたんだよね。

というわけで、強制帰宅。

のハズだった。

一人で見慣れたいつもの道を歩いて。

やたらと綺麗な青だなあって、空を見上げた。

視線を戻したら、街はいきなり白く霞んでいた。

私の目のせいかなって手でこすってみたけど、そういうわけではないらしい。

自分の手は見えるけど、3メートル先は怪しい。

「何これ。」

思わず立ち止まったら、背中にドンッて何かがぶつかった。

「あ．．．ご．．．ごめんなさい！」

反射的に謝ってから、ぶつかられたのは私よねって思った。振り返るとそこに、猫がいた。

バーテンダーとかが着てるチョッキ、アレを着てる。

黒いスラックスに革靴。

白いシャツ。

その胸元から見えるのは．．．紫色の毛並み。

口が耳まで裂けてる。

緑色の瞳が、真っ直ぐ私を見てた。

私はその場で固まった。

それが猫で、服を着てるってとこまでは理解出来たけど、それが異常だって事を認識するまでに時間がかかったのだ。

頭が働かないのは、貧血のせいかなあ。

なんてボンヤリ考えていた。

だって、あんまり当たり前にそこに立っていたんだもん。

「二足歩行．．．」

もつと驚くべきところがあるはずなのに、私の口から零れたのはそれだった。

猫はその真ん丸の目をスッと細めた。

「貴女だって二足歩行でございましょう、シロウサギ。」

それが、自分に向けられた言葉だって気付くのに数秒。

猫が喋った事を、異常だって認識するのに数秒。

「はあ!？」

頭がついていけない。

これは夢？

こんな真つ昼間の道端で？

．．私、また倒れた？

やっぱり先生に送ってもらえばよかったかな．．。

「さあ、早くしないとアリスに追い付かれてしまいますよ。」

猫はさして急いでもないような口調で言った。

アリス？

誰、それ。

「は？」

猫の言葉理解するのって難しい、とか現実逃避な考えが頭の中をよぎる。

猫は鼻をヒクヒクさせた後、私の腕を握ってグイグイと歩き出した。肉球が気持ちいい。

って．．．そうじゃないでしょ。

「ちよつと待つてよ。あなたは誰？」

私の言葉に猫の耳がピクピクと動いている。

「僕ですか？僕はチエシヤ猫です。当たり前でございましょう？」

そうか。

当たり前なのか。

納得していいのかしら。

だって、私１７年生きてきたけど猫は喋らないし、二足歩行しないし、耳まで口は裂けてない。ましてやチエシヤ猫だなんてのは常識じゃないはず。

．．チエシヤ猫？アリス？

なんだか何処かで聞いたことのある名前だ。

誰だって一度は聞いたことあるはず。

そうでしょ？

アリスはお姉さんの隣で退屈してた。

そこをシロウサギが通り掛かって。

アリスは追い掛ける。

ハートの女王さまや、トランプの兵士や、ネズミやらなんやらに出

会って．．．最後はどうなったんだっけ？

あんまり詳しくは覚えてない。

「私はシロウサギじゃない。」

時計を見て急いでたりしてない。

公爵だか伯爵夫人と約束もしてない。

「ウサギですよ。僕はシロウサギを間違ったりいたしません。」

．．．何処からその自信が沸き上がって来るんだろうか。

私はウサギみたいに耳は長くないし、目も赤くない。

白い毛皮だつて着てないのに。

「ちよつと．．．何処行くの？」

振り払いたくても、凄い力で振りほどけなくて。

引きずられるように見慣れた街を歩く。

霧が次第に濃くなってきた。

猫は派手な紫だし、しつかり腕を握られてるから、見失ったりはぐれたりはいないけど。

グングン手を引かれて、私とチエシヤ猫は公園にやってきた。

すべりだいと砂場しかない小さな公園。

家の近所で、小学生の頃はよく遊んだ場所。

その周りを囲む椿の生け垣の手前で、チエシヤ猫は立ち止まった。

腕が解放される。

「さあ、飛び込んで早く準備をしてくださいませ。」

チエシヤ猫はそう言つて地面を指差した。

そこには穴があつた。

ポツカリ丸い穴。

底は暗くて見えない。

「なんで私が？」

私の問いに、チエシヤ猫は目を細めて言った。

「貴女がシロウサギだからですよ。」

訳がわからない。

誰か．．．私にわかるように説明して．．．。

「だから違つたら！もう帰る！」

なんだか腹が立ってきて、私は踵を返した。

3歩進んだところで、グイッと手を引かれた。

「だから！」

振り払おうと振り返ると、チエシヤ猫の顔が物凄い間近にあって思わず地面に尻餅をついてしまった。

「いったあ．．．」

お尻が痛い．．．。

ああビツクリした．．．。

「早く行かないと、アリスに食われますよ？」

私を見下ろして、チエシヤ猫は言った。

急に向けられた冷たい声に、少し驚いてチエシヤ猫を見る。

「食われ．．．る？」

私は食べ物じゃない。

人間だよ？

「アリスはウサギを食べないと元に戻れないですからね。」

へえ。

．．．！？

「元につて．．．アリスつて子に何したの！？」

チエシヤ猫は首をかしげた。

「僕は何もしてないですよ。やったのはアリス自身でございましょう。」

アリス自身。

自分で自分に何かして．．．私を食べなきゃ戻らないって？

私の人権はどうなるわけ？

「ウサギに人権はないのですよ。」

チエシヤ猫が言った。

今、心．．．読まれた？

「何なのよ．．．」

頭が痛くなってきた。

言い返す気力すら奪われる。

私には、食べられる義務があつて、生きる権利は無いって事??
だいたいそのアリスってのは誰なの?

「さあ、立って早く兎穴に。」

チエシヤ猫が手を差し出してくれる。

手の平は毛が白い。

人間と同じスラリと細い指。

指先と、手の平の真ん中に肉球がついてる。

私は、操られるようにその手を取った。

立ち上がったら、チエシヤ猫がスカートの砂を払ってくれた。

そして、私は穴の前に立った。

・・・というわけで、私は穴を覗いている。

底はやっぱり見えない。

かなり深いんだろうか。

「えっ・・・と・・・」

チエシヤ猫を振り返ろうとして、出来なかった。

ドンツて背中を押されて、地面が無くなった・・・

「きゃああああ!!」

あつという間に闇に吞まれる。

私の体はドンドン落ちていく。

見上げた穴の入口がいい加減見えなくなった頃、私は悲鳴を上げるのをやめた。

いつまで落ちるんだかわかったもんじゃない。

チエシヤ猫はついて来ていないみたい。

まったく。

なんて無責任なんだろ。

下を見てみたいけど、下手に動いて壁にぶつかるのは嫌だ。

というか、私は落ちてるんだろうか。

真っ暗だからだんだん感覚が無くなってくる。

いつまで、どこまで落ちるんだろう。

私．．．なんでこんなに落ち着いてるの？

．．．結構な速度で体が移動してるのだけは、風が体に当たる感じがわかる。

地面についたとき、グシャってなる．．．よね？

「ちよつと！チエシヤ猫！！私まだ死にたくない！！！！」

なんであんな胡散臭い猫（しかも二足歩行）の名が出てきたんだろう。

どうして？

真つ暗な中、やることも無いから余計な事を考えてしまう。

考えだしたらキリがないでしょ？

大体、まあ100歩譲って私がシロウサギだとして、なんでアリスに食べられるわけ？

何だか、お肉を食べれなくなりそう。

切り身になってるから気にもしてなかったけど、牛や豚だって『なんで食われなきゃいけないんだ』って思ってるに違いない。

暗闇を見つめてボンヤリ考えていたら、ドスンと背中が地面についた。

「痛つつう．．．」

痛いけど、死んじゃうほどじゃない。

枯れ葉と枯れ枝のクッションに私は落ちたらしい。

ゆっくり体を起こす。

たいした事ないみたい。

私は立ち上がると、制服に付いた枯れ枝を払った。

改めて辺りを見回してみる。

薄暗いけど、全然見えないわけでもない。

目が慣れたのか、落ちて来た穴よりは幾分か明るいのか。

今はどっちだっていいけど。

ここは穴の底。

でも、見上げてても入口は見えない。

周りの壁は土で、結構しっかり固まってるみたいだ。

起き上がった目の前に横穴があった。

そんなに大きな穴じゃないけれど、膝をついて行けば入れない事もなさそうだ。

「行くしか無いって事ね」

そう。

他に選択肢といえ、ここにブーツと突っ立って、誰か来ないか、上からロープが降りてこないか、ただ待つ事。

“アリスに食われますよ”

チエシヤ猫の言葉が頭をよぎる。

アリスが誰だか知らないけど、食べられるのはごめんだ。

私は膝について横穴に入ることにした。

やっぱり暗くて先は見えない。

下は土だから膝が痛い。

もう．．．なんで私がこんな目に？

これは夢に違いないわ。

こんな不思議な事が起こる筈ないじゃない。

口裂け猫は喋るし、穴を落ちても怪我の一つもしないし、真っ暗な

穴の中を進まなきゃならない。

膝も腰も痛いし．．．

って．．．痛い？

夢で．．．痛いつて有り得る？

夢．．．よね？

思わず止まると、穴の向こう側から風が吹いて来るのがわかった。

目を上げると、明かりが見えた。

「出口！」

私は夢中で横穴を這い出た。

急に明るい場所に出たから、眩しくてしばらく何も見えなかった。

次第に目が慣れて来て、私は膝の土を払った。

そこは、ちょうど私が立てるくらいの高さしかない部屋だった。

沢山の扉が壁に並んでいる。

その扉は、屈んでも通れそうもない。

高さが手の平3個分、幅は1個半分くらいしかないし。体を挟んでも、お尻がつつかえたりしたら嫌だ。

抜けなくなった時に、引っ張り出してくれそうな人材もこの部屋には居ないみたいだし。

取り敢えず、扉が開くか一つ一つ確かめてみる。

天井から下がったシャンデリアを上から見下ろすなんて、あんまり体験出来ないよね。

私が巨人な気分になるけど、この部屋が小さいんだ。たぶんね。

あの穴を落ちてる間に、私の体が巨大化してない、だなんて言い切れない。

何しろ、さっきから不思議じゃない事の方が珍しいくらいだし。ぐるっと見て回ったけれど、扉は一つも開かなかった。

「行き止まり・・・」

私は考えた。

扉には鍵穴がある。

だから鍵があれば扉は開く。

つても、開いたからってどうなる？

通れないじゃない？

「アリスはたしか・・・なんか飲んだのよね？体が小さくなる飲み物。」

部屋を見回す。

扉以外に何も無い。

その時、不意に目の前の扉が開いた。

ネズミがちよこつと顔を覗かせる。

「おやシロウサギ。今日の君はやけに大きいね。」

ネズミは私を見上げてそう言った。

「あなたは誰？」

ネズミに話し掛けられてももう驚かない。

そのネズミが猫くらいの大きさでも、だ。

「僕はネズミだよ。当たり前だろう？」

ネズミはそう言って、その小さな目を細めた。

私はまた、“当たり前的事”を聞いたらしい。

でも、日本語を操るネズミは始めて見たんだから聞いたっていいはず。

「私はシロウサギじゃないわ。」

言っと、ネズミはゆっくり首を傾げた。

「君はシロウサギ以外の何者でもないよ。だって凄く美味しそうだ。」

...

理解するまでにほんの少し時間がかかった。

美味しそう？

「！！美味しくない！」

思わず叫んだら、ネズミはキャツと言って扉の影に隠れた。

食べ物扱いされて、気持ちのいい人が何処にいる？

「でもシロウサギ・・・君は食べ物だろう？」

ネズミが言った。

「食べ物じゃない！！！」

バンツと地面を叩くと、ネズミは跳びはねて扉の向こうに身を隠した。

チェシヤ猫といい、このネズミといい、おかしいんじゃない？

私の何処を見て食べ物って？

「でも君はシロウサギだ。だから食べ物だし、美味しいんだよ。」

扉の向こうからネズミの震えた声がそう言った。
なるほど。

この世界のシロウサギは食べ物で美味しいらしい。

でも私はシロウサギじゃない。

だから美味しくない。

ハズ。

タブン。

「私はシロウサギじゃないっただら。」

私が言うと、ネズミは扉の影から目だけ出して私を見た。

「シロウサギだろ。」

ネズミは私をジッと見て言った。

だから、その自信は何処からくるのよ？

「チエシャ猫といいネズミといい．．．」

私が呟くとネズミは体をビクツと震わせた。

「い．．．今何て？」

ネズミの震えた声に首を傾げる。

「え？だからチエシャ猫といい．．．」

「チエシャ猫がいる?!」

ネズミが言った。

「今はいいわ。穴の入口まではいたけど。」

私が言うと、ネズミは横穴の方を振り返った。

もちろんチエシャ猫はいない。

「早く行こう。アリスに追い付かれるぞ。」

ネズミは慌てた様子でそう言って、扉の向こうから瓶を引っ張って来た。

中には赤黒い液体が入っている。

赤ワイン？

それにしても赤黒すぎるかな？

何か、血みたい。

「さあこれを飲むんだ。」

ネズミはそう言った。

「これ何？」

私が聞くと、ネズミは瓶を差し出しながら言った。

「アリスの涙だよ。」

．．．。

アリスってこんな、血みたいな涙流すわけ？

「ほんの一口にしておくといい。」

ネズミはそう言ってもう一度、瓶を差し出した。

私はこの際飲むしかないんだってわかった。

だって行き止まりだから。

瓶を受け取る。

ニオイを嗅いだら、どこかで嗅いだことのあるニオイだった。

瓶に直接口を付けて、ほんの少し口に含む。

「プルーン？」

そうだ。

プルーンの味。

小学校の給食で食べた以来だけど、意外と覚えてるもんね。

なんて思ってたら、クラッて眩暈がした。

天井がみるみる遠ざかって、ちょうど扉を潜るのにいい大きさになった。

「ホントに縮むのね。」

呟くとネズミは扉の向こうから手招きした。

「縮むよ。シロウサギだからね。」

そう。

シロウサギはプルーンジューズで縮むのね。

それもこの世界の常識らしい。

私はネズミに招かれるまま、その扉をくぐった。

ネズミは扉の鍵をしめる。

扉の先は大きな屋敷の前だった。

「すっごいお屋敷。」

呟いて振り返ったら、入ってきた扉も、ネズミも綺麗に消えていた。

「何なのよ．．．もお．．．」

私は取り敢えず目の前の屋敷をもう一度見上げたのだ。

第二章 公爵夫人

屋敷はとても大きく見えたけれど、それは私が小さくなってるからだつてすぐに理解した。

なんでつて？

屋敷から出て来た蛙がやたら大きかったから。

蛙は召し使いだか執事だかしらないけど、そういう服を着ていた。立派な二足歩行だ。

蛙は入口から伸びる階段に座り込んでふうと溜息をついた。

蛙の溜息なんて始めて見たわ。

「こんにちわ蛙さん。」

取り敢えず声をかけてみる。

他に喋りそうなモノは無いし、この際だから蛙と喋るくらいしてみてもいいかなつて。

「わあ、シロウサギやん。」

蛙が言った。

低い男の人の声だ。

あれ？

蛙つて両生類だっけ？爬虫類だっけ？

私の記憶つて曖昧だわ。

「そこで何してるの？」

聞いてみる。

別に興味はないけど。

「あの赤ん坊をどうにかして泣き止ませないと皆、頭がどうかしてしまいそうだなあ。でも妙案が浮かばないんや。」

．．．なんで関西訛り？つて疑問はあえて無視。

話が進まないしね。

で？赤ん坊？

耳を澄ますと、たしかに扉の向こうから赤ん坊の泣き声が聞こえた。

「そう。大変だね。」

私が言うと、蛙は私を見た。

「君も大変そうやなあ。今日はまた、体がやけに小さいやんか。」
「やっぱり、私が小さいのね。」

でも、たしかネズミはやけに大きいって言わなかったっけ？

まあ考えてもわかんない事はわかんない、よね。

「元に戻る方法を知ってる？」

やっとまともな会話になる動物（関西訛りが気になって仕方ないけど）に会えた私は、聞いてみることにした。

蛙は少し考えて、扉を指差した。

「中にチェシヤ猫がいるから、聞いてみるといい。聞こえればやけど。」

蛙はそう言って耳を塞いだ。

「中に行くなら深呼吸して、ちゃんと覚悟を決めてから行くんやで。」

「どういう事？」

私は首を傾げて大きな扉を思い切り引つ張った。

「うわっ」

私は思わず耳を塞いだ。

凄い音。

恐る恐る中に入ると、外からボタンと扉が閉まった。

近所迷惑だもんね。

うん。

ホント頭がどーにかしちやいそう。

屋敷の中はぐちゃぐちゃの大騒ぎだった。

沢山の蛙が体をピクピクと痙攣させて倒れてるし、奥のキッチンには物凄い勢いで料理をしている女が見える。

彼女が作った料理を運ぶ蛙達は皆くしゃみを連発していて、部屋中が白い何かに覆われている。

「クシュン！」

鼻がムズムズする．．．。

料理が運び込まれていく部屋をそつと覗いてみると、テーブルに並べられた料理を片手でパクつきながら、片手で赤ん坊をあやしている女の人がいた。

赤ん坊は物凄い声で泣いているけれど、彼女には関係ないらしい。

運ばれてくる料理を片っ端から平らげている。

部屋を見回すと暖炉の上に、いた。

チエシャ猫だ。

暢気に顔をあらったりしてるし。

「チエシャ猫！」

私はチエシャ猫に駆け寄るとありったけの声で叫んだ。

「ねえチエシャ猫！あれは誰！？」

チエシャ猫はひょいって暖炉から飛び降りた。
頭がガンガンしてきた。

チエシャ猫は私の耳元に顔を近付けて言った。

「彼女は公爵夫人です。」

アレが公爵夫人か。

凄い食欲ね。

「クシュン！」

舞い上がる粉が鼻と目を刺激する。

これって．．．コショウ？

よく見たら、赤ん坊もくしゃみを連発してる。

．．．だから泣き止まないんじゃないやなくて？

「ねえ！元の大きさに戻りたいの！！」

チエシャ猫を見上げて言うと、チエシャ猫は私を抱き上げた。

「蛙がキノコを持ってるはずです。」

チエシャ猫はそう言って部屋を出た。

ホールには犠牲者がまた数人（匹？）増えているようだった。

「大きな音を聞き続けると、皆失神するらしいですね。」

チエシャ猫はそう言うと、私を見た。

「耳を塞いでいてください。シロウサギが倒れたら逃げられなくなりますからね。」

「そりゃそうだけど。」

「ちよつと考えた私は、素直に耳を塞いだ。」

「だって、失神してる蛙みたいにはなりたくないじゃない。」

「泡吹いてるし...。」

「チエシヤ猫はキッチンに入ると、私の鼻をつまんで蛙と何か話をしているみたいだった。」

「息苦しいってば！」

「つて手を振り払おうとしたら、チエシヤ猫は」

「クシヤミ死には嫌でしょう？」

「と言った。」

「言われてみれば、周りにいる生き物でクシヤミをしてないのは料理をしている女の人とチエシヤ猫だけだ。」

「蛙はくしゃみを連発しているようだったけど、チエシヤ猫の言う事にコクコク頷くと何か言った。チエシヤ猫はキッチンを出て私に言った。」

「赤ん坊を泣き止ませたらくれるらしいですよ。」

「耳を塞いでも聞こえるんですけど？」

「というか、何で泣き止ませたらとかいう条件付き？」

「まあ切実な訴えなのはともよくわかる。」

「まあやってみるけど。」

「私は少しむくれて言った。」

「チエシヤ猫は目を細めて笑った。」

「口が耳まで裂けてるから常に笑ってるように見えるんだけどね。」

「チエシヤ猫に抱き上げられたまま、私は公爵夫人のいる部屋に戻った。」

「赤ん坊は声を枯らすことも無く、泣き続けている。」

「私、絶対あの胡椒のせいだと思うの。」

「チエシヤ猫に言うと、チエシヤ猫は」

「僕も同感です。」

と言った。

耳を塞いでも、こんなうるさい場所でも何故か会話が成立するから不思議。

今更、不思議な事に驚きはしないけどね。
で、だ。

このコシヨウ地獄からあのベビーちゃんを救出しないと。

私は元の大きさに戻れないし、あのベビーちゃんもなんだか可哀相。
「公爵夫人。」

チェシヤ猫にテーブルの上におろしてもらった私は、コシヨウのたつぷりかかったチキンに噛り付いている公爵夫人に声をかけた。

「おや、美味しそうなウサギじゃないか。」

公爵夫人はそう言っただけ私の体を掴み上げた。

大きな顔の前に掲げられて、私は引き攣った笑顔を彼女に向けた。

「赤ちゃんをあやすのを手伝いさせていたどうかと・・・」

彼女はそれを聞いて、片腕に抱いた赤ん坊を見た。

相変わらずクシャミをしては泣きわめいている。

その顔に公爵夫人の体に積もったコシヨウが降りかかって、更にワツと声を上げる。

「ひえ」

私は慌てて耳を塞いだ。

こりゃ蛙達も失神するかもしれない・・・。

「この子を泣き止ませる？そりゃいい心がけだね。」

公爵夫人はそう言っただけペロリと口の周りを舐めた。

・・・とてつもなく身の危険を感じるのですが？

「あ・・・あの・・・」

身を引こうにも、私の体は完全に公爵夫人の大きな手に捕まってるし逃げられない。

「それにしても、やっぱりシロウサギは美味しそうだねえ。」

ヤバイですよ。

この大きさの口なら一口で食べられちゃいますけど、何か？

「気をつけてくださいね、シロウサギ。油断すると食べられますから。」

チエシャ猫の声がそう言った。

そんな冷静に忠告してる暇があるなら、助けてくださる？

「公爵夫人、赤ちゃんに外の空気を吸わせてやってはいかがでしょう？」

精一杯の敬語でそう言うと、公爵夫人は赤ん坊を側にあつた乳母車にヒョイって投げ入れた。

赤ん坊は見事に乳母車に着地した。

でも、ビックリしたんだろう。

余計大声で泣き叫んだ。

く．．．クラクラしてきた。

「私は食事中だから行つてきておくれ。」

公爵夫人はそう言ったかと思うと、私も地面に投げ捨てた。

ちよつと！！

さすがにこの高さから落ちたら痛いじゃ済まないっぽいんですけど！！！！

「さあ行きましょう。」

私の体は地面に当たる直前に紫の手に抱き留められた。

チエシャ猫は私の体を小脇に抱えたまま乳母車を押してテラスに出た。

胡椒地獄から抜け出した赤ちゃんは暫くグズグズ泣いていたけれど、疲れたのか温かな日差しをうけてウトウトし始めた。

「これで蛙さん達の悩みは胡椒地獄だけになったわね。」

私が言うと、チエシャ猫は目を細めた。

「よくやってくれたねシロウサギ。」

蛙はクシャミをしながらそう言った。

そして、なんだか恐ろしい色のキノコをチエシャ猫に手渡した。

「さあ早くお逃げシロウサギ。アリスが来てしまふ。」

蛙はそう言って厨房の奥の扉を指差した。

「ありがとう蛙さん。」

私はお礼を言くとチエシャ猫を見上げた。

チエシャ猫は私を抱えたままその扉をくぐった。

第三章 終わらないお茶会

扉の先はまだ屋敷の中のようなだった。

バタンと閉まった扉を振り返ると、すでに扉はそこに無くて白い壁の廊下がずつと先まで続いていた。

思わずチェシャ猫を見上げると、チェシャ猫は私にキノコを差し出した。

物凄く毒々しい色なんですけど。

ピンクに黄色い斑点で、決して体に良さそうには見えない。

「どうぞお食べください。ただし、一口にしておかないと大きくなりすぎますよ。」

チェシャ猫に言われるまま、私は意を決してキノコをかじった。

ガリツと噛み砕く歯ごたえに驚いた。

甘い。

．．マジパン？

なんて思っている間にグラリと目眩がして、気付いたら地面に足がついていた。

目を開けたらそこにチェシャ猫はなくて、延々と続く廊下だけが私の前にひろがっていた。

前も後ろも先が見えない。

「ちよつと．．．」

またわけわかんない所に置いてどっか行くし。

盛大に溜息を吐き出して、取り敢えず今向いてる方向に歩いてみる事にした。

石造りの床に足音が響く。

窓もドアも無い。

ただ真つすぐな廊下を黙って歩く。

頭がボーッとしてくる。

赤い絨毯と、白い壁のコントラストで目がチカチカする。

そこに、ガシャンと何かが割れたような音がして、体がビクリと跳ねた。

その音は立て続けに、静かな廊下に鳴り響き、何か喚いている人の声が微かに聞こえた。

いや、人かどうかは定かじゃないけど。

私はその音がする方へ（と言っても、廊下は真つすぐなのだけけれど）歩いた。

音の根源は廊下の突き当たりを抜けた、テラスの奥らしかった。

そつと覗いてみると、3つの影がテーブルについているのが見える。ネズミとウサギとシルクハットを深々とかぶった．．．たぶん人間。背丈だけ見たらまだ子供のように見える。

「ああ場所が無い。」

彼等は口々にそう言っていた。

でも、彼等の前には1人と2匹で使うには広すぎるくらいのテーブルが鎮座している。

テーブルの上は荒れ放題で、そのうえネズミがうつらうつらしてはテーブルの上のカップやらティーポットやらを倒すので、白いテーブルクロスにはあちこち茶色の染みが広がっていた。

凄いい所に出くわしてしまった、と私は思った。

声をかけるか迷っていたら、先にウサギに見つかってしまった。

「あんたはシロウサギではござらんか。」

仕方なく私はテーブルに近付いた。

床にもカップやティーポットの破片が撒き散っている。

「こんにちは。えーつと．．．」

「わしは三月ウサギでござる。」

ウサギはそう言って、鼻をヒクヒクさせた。

「シロウサギが来たなら、もうすぐアリスも来るね。」

シルクハットの少年（声が男の子だった）が言った。

シルクハットの少年はタキシードの胸ポケットから懐中時計を取り出して、しばらく眺めた後に（シルクハットごしに見えてるのかは

不明だけど）三月ウサギに言った。

「やっぱりマーガリンは良くなかったかもしれない」

三月ウサギは

「どれ」

と言つてその懐中時計を受け取つた。

ちよつと覗き見てみると、時計はピッタリ3時をさしていた。

私は自分の腕時計を確かめる。

私の時計によると、今は1時26分だ。

「止まつてるの？」

思わず言つと、シルクハットの少年が私を見た。

「壊れてはいないはずなんだ。ただ、”時”の機嫌を損ねたらしいのは確かなんだよ。」

“時”の機嫌？

また、私にはわからない常識の二オイがする。

「シロウサギは“時”と仲がよかったりしないでござるか？」

三月ウサギが言った。

「“時”というのは、時間の事？」

私の問いに、シルクハットの少年と三月ウサギは顔を見合わせた。

「同じなようで・・・違うかもね・・・」

グッスリ眠っていると思つていたネズミが言った。

そして、うつらうつらした後、三月ウサギのカップの上に倒れ込んだ。

「こら眠りネズミ！人のカップの上で寝るなよ！」

シルクハットの少年が言つたけれど、ネズミはすっかり寝息をたてている。

「仕方ない。席を移ろう。」

三月ウサギはそう言つて、ネズミをシルクハットの少年がいた席に押しやると、ネズミがいた席に座つた。

シルクハットの少年も隣の席についている。

「で、“時”の機嫌を損ねてどうしたの？」

私が聞くと、シルクハットの少年はテーブルを指差した。

「ずっとお茶の時間から抜け出せなくなったんだ。カップを洗う時間もない。」

「．．アホかもしれない。」

「やめちゃえばいいじゃない」

私が言うと、三月ウサギはブルブルと首を振った。

「“時”に逆らうような事をしてみる。女王様に首をはねられるぞ。」

「女王様？」

誰なんだろう。

ハートの女王とか言わないよね？

言うのかな．．。

「とにかく“時”の機嫌を取り戻さない事にはどうにもならないんだよ」

シルクハットの少年は言った。

そして、ポンッて手を叩いた。

「そうだよ三月ウサギ。“時”にシロウサギを差し出してはどうだろう。」

「それは名案でござる。」

三月ウサギはそう言って、テーブルの下から次々と時計を出し始めた。

その時計はどれも3時ピッタリをさしている。

秒針は動いてるのに．．。

「さあシロウサギ。君は今から“時”とティータイムだ。紅茶をどろぞ。」

シルクハットの少年がカップを差し出した。

また勝手に話が進んでません？

「ちゃんと“時”の機嫌をとって来ておくれよ。」

シルクハットの少年の声と共に、私は物凄い眠気に誘われて意識を失った。

「目を覚ましてシロウサギ。」

体を揺すられて、私は眠いまぶたを擦った。

薄く目を開けると、薄暗い部屋の白い天井が目に入った。

あれ？

私、何してたっけ？

へんてこなお茶会で・・・“時”に差し出された？

「こんにちはシロウサギ」

ベットサイドから声がして、私は勢いよく起き上がった。

声の主を確かめるように視線を走らせる。

・・・いない？

「ここだよ。」

声はする。

じつと目を懲らすと、小さなテーブルの上の時計が目に入った。

「わかったかい？シロウサギ。」

やっぱりそうだ。

熊の形をした時計から声が聞こえる。

お腹の部分についた時計は3時を示している。

これが“時”？

でもさ、私ったら揺り起こされなかったっけ？

このくまさんの時計にそんな芸当が出来るとは思えない。

そこまで考えて、馬鹿らしくなったからやめた。

考えてわかる事じゃないというのはわかる。

「ええ、たぶん。」

とりあえず相槌をうつ。

しかし、時計に話し掛けるのって物凄く違和感。

「どうして此処に来たんだい？」

“時”はそう言った。

カチカチと秒針の音がやけに耳につくのは、この部屋が異常に静か

だからだろうか。

「お茶会が終わらないから、時間をすすめてもらいたってシルクハットの男の子が。」

「帽子屋の願いは聞かない!!」

時計がガタリと音をたてて床に落ちた。

「だ．．．大丈夫？」

床から拾いあげてテーブルに戻すと、“時”は

「ありがとう」

と言った。

どうやらシルクハットの少年は帽子屋で、“時”は帽子屋が嫌いみたいだ。

でも、なんとか仲直りしてもらわないと話が次に進まないような気がしてならない。

「その．．．帽子屋と喧嘩してるの？」

恐る恐る聞いてみる。

“時”は黙った。

何も言わない。

ただ、その秒針の音がカチカチと耳障りに部屋を満たしていく。き．．．気まずいんですけど？

何か言つてよ。

「帽子屋の願いじゃなくて、私の願いだって言ったら．．．聞いてくれる？」

恐る恐る聞いてみる。

“時”はやっぱり何も言わない。

「ねえ、あなた名前は？」

どうしてそんな事を聞いたんだろう。

でも“時”は、やっと口をきいてくれた。

「そんな事、聞かれたのは初めてだよ。」

何か温かいものにフワツと包まれた感じがした。

何これ。

「僕はクロノス。」

声は時計から聞こえる。

でも、何か．．．そう腕みたいな何かに包まれている。

「何をしているのですか、シロウサギ。」

不意に声がして、私は振り返った。

といつても、体は何かに捕まえられているから首だけ。

そこにはチエシヤ猫がいた。

「あんたねえ。神出鬼没にも程があるでしょう。」

思わず言ったら、チエシヤ猫は右手で顔を一撫でした。

ごまかしたな。

このペテン猫。

「おや、“時”ではないですか。シロウサギをお離しなさい。」

チエシヤ猫が言った。

“時”がカタリと動いた。

「嫌だ。」

私の体を包んでいる何かが少し力を強めた。

これ．．．“時”？

「シロウサギは逃げなければなりません。」

チエシヤ猫は言った。

“時”は不機嫌にガタガタと揺れる。

「アリスが来たら戻してしまえばいい。僕の側にいれば安全だよ、

シロウサギ。」

安全。

私にとっての危険って何だろう。

アリスに食べられる事？

姿の見えない“時”に捕まってる事？

胡散臭いチエシヤ猫の言う通りに逃げ続ける事？

きっと“どれも”だ。

私は普通の生活に戻りたいのに。

でも、普通って何？

「とにかく時間を動かして。」

どうでもよくなって、私は言った。

今は時間を動かして、次に進むのが賢明だ。

あんなフオークダンスみたいなお茶会になんて巻き込まれたくもない。

「何故？」

聞いたのはチエシャ猫だった。

「このままだと、私まで延々と続くお茶会に巻き込まれそうだから。」

答えると、チエシャ猫は目を細めて笑った。

笑い事じゃないでしょと言いかけた時、左手の小指にチクリと痛みが走った。

「痛っ」

慌てて引つ込めて見てみると、赤く歯型がついていた。

「何これ。」

思わず呟いたら、チエシャ猫が腕をぐいっと引つ張った。

無理矢理引き上げられて、ベットからおろされる。

「シロウサギを食べてはなりません。」

チエシャ猫はきっぱりそう言った。

空中に向けて。

「少しくらいいいだろう。」

時計から声は聞こえてくる。

何がどうなっているんだろう。

考えたって答えが出るとは到底思えないけれど。

「そこが大事な部分だったらどうするのです。」

チエシャ猫が諷めるようにそう言っ、
“時”はまた黙りこんだ。
また知らないうちに私を食べる、
食べないの話になってない？

しかも、大事な部分でどういう意味？

アリスにとっ、とって事？

アリスが私の小指が好物だったらがっかりするだろうって？

「小指は骨ばかりで固そうね。」

呟いた自分の言葉に吐き気がした。

これはまずい。

完全に毒されてきてる。

「そうですね。でもまあ歯ごたえなど関係ありませんよ。一飲みでしようし。」

チエシヤ猫が言った。

そう、一飲みね。

私としては痛くなさそうだなによりだわ。

もう腹も立たないし、言い返す気も失せてきた。

ただわかる事と言えば、アリスというソレが決してかわいらしい女の子ではないだろうって事。

「ねえ、チエシヤ猫は私が美味しそうだと思う？」

変な質問だ、と解っていた。

チエシヤ猫は驚いたのか、アーモンド型の目を見開いた。

“時”がカタンと音をたてる。

「何よ。人の事さんざん食べ物扱いしといて答えられないの？」

思わずきつくなった口調に自嘲する。

ムキになるような事じゃない。

「僕はシロウサギは食べませんよ。」

チエシヤ猫はそう答えた。

「でも美味しそう？」

何をこだわっているんだろうか、私は。

チエシヤ猫は私をじっと見つめてる。

“時”が居心地悪そうにカタンと揺れた。

「時間を進めれば・・・。」

”時”が言った。

「この議論は終わる？」

脅えた様な声に今日、何度目かの溜息をついた。

「そうね。終わりにしてもいいわ。」

そうだ。

今はさつさと時間を元に戻して、あの不毛なお茶会を終わらせるのが先決だ。

「早くしないとアリスが追いついてしまいますよ。」

チエシャ猫が言った。

私にとつて”アリスに追いつかれること”はそんなに重大な損失なんだろうか。

そりゃ、食べられちゃたまないけど。

「それじゃ、時間を元に戻すけど、アイツを許したわけじゃないからねっ。」

”時”はそう言ってカタンと揺れた。

同時に床がグニヤリと歪んで、私はまた気を失ったようだった。

「おかえり、シロウサギ。」

頬に当たる柔らかい何か、で私は目を覚ました。

ゆっくり目を開けると、三月ウサギが私の顔を覗き込んでいた。

その柔らかな感触が肉球だって理解した後、私はあのお屋敷の庭に戻って来たのだという事を知った。

体を起こすと、私は例のテーブルのど真ん中に横たわっていたらしかった。

「いつの間に片付けたのよ。」

もの凄い惨状だったテーブルの上は綺麗に整えられていて、テーブルクロスまで糊がパリツときいた真っ白なものに変わっていた。

「時間が戻ったからね。お茶会は終わりだ。」

シルクハットの少年、”時”が言うところの帽子屋がそう言った。自慢げに掲げて見せた懐中時計の針は2時15分をさしていた。

「でも、もうすぐまたお茶会の時間だわ。」

私が言うと、眠りネズミがうつすらと目を開いた。

「お茶会の間に、また”時”の機嫌を損ねたりしなければ大丈夫だよ、シロウサギ。」

眠たそうに目をこすりながら眠りネズミは言った。

まったくその通りだ。

「そういえば、またいなくなったわね。チェシャ猫のやつ。」

私が呟くと、1人と2匹はガタンと音を立てて立ち上がった。

「今、何て言った？」

帽子屋が言った。

「もしかして、あんたらもチェシャ猫にビビるタイプ？」

私は最初に会った猫くらいの大きさのネズミを思い出していた。

彼も、チェシャ猫の名前を出した途端、顔色を変えたっけ。

「チェシャ猫がいる？」

眠りネズミが言った。

こんなにシャキツとしてる眠りネズミ初めて見た。

「さっきまでいたのよ。」

言つと、1人と2匹は顔を見合わせた。

「早くしないとアリスが来てしまうでござるよ。」

三月ウサギが言った。

「さあ早くお行き。この先は道が悪いから十分注意して。」

眠りネズミが欠伸まじりに言った。

シャキツとしてるのもそろそろ限界みたいだ。

指された方向はこの屋敷を囲んでいるらしい生け垣。

人1人がやつと通れるくらいの隙間が、そこに口を開けていた。

先は暗くて見えない。

次はどこに連れていかれるんだろうか。

今更行かないわけにはもういかない。

前に進むしかない。

「”時”と仲良くね。」

言ったら1人と2匹はコクリと頷いた。

じゃあね、と手を振って、私は狭い生け垣の隙間に体をねじ込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1667b/>

アリスの国の兎

2010年12月31日02時22分発行